

フランスの新たなモビリティ・サービスに関する調査報告

A Report of New Mobility Service in France

水田哲夫¹ 牧村和彦²

By Tetsuo MIZUTA and Kazuhiko MAKIMURA

1 はじめに

本稿では、MaaS (Mobility as a Service、マース) や新たなモビリティ・サービスの先進的な取り組みを行っているフランスにおける調査結果 (2019年8月) について報告する。紙面の都合上、OECDのITF (International Transport Forum) 及びストラスブール市へのヒアリング結果と、パリとストラスブール市の交通状況について紹介する。

2 モビリティ革命や都心改造が進む花の都パリ

(1) ITFヒアリング

OECDの中で、世界の交通政策をリードし、様々な提言やガイドライン、調査研究を進めているITFに最近のMaaSの動向、フランス国内で審議中のモビリティ法案について、ヒアリングを行った。

欧州ではMaaSを、マルチモーダルな移動手段を一つの情報プラットフォームに統合し、利用者に提供する次世代のモビリティ・サービスと捉えている。MaaSプラットフォームの開発企業が、都市や社会に大きな影響を及ぼす可能性があり、世界でプラットフォーム開発競争が激化している。社会的かつ公共政策として、MaaSプラットフォームをどのように構築していくかが政策課題であると捉えている。

その際、欧州では、図-1のような3段階のモデル



写真-1 ITFとの意見交換の様子 (OECD) (筆者撮影)

を想定している (現在はそれぞれのモデルが欧州で存在)。最終的には公共交通セクターあるいは公共交通事業者が全体のプラットフォームを統合していく、モデル3の世界が必要であるとの話であった。これまでの都市交通の計画や運営は行政が担い、運行やサービスを民間企業が行ってきた欧州の持続可能な考えが根底にはあるのであろう。

また、フランスでMaaSを含むモビリティ法案の検討についてもお話を伺うことができ、有意義なディスカッションができた (その後、モビリティ法案は2019年12月に可決。文献1に詳しい)。

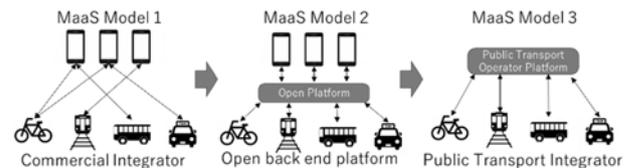


図-1 MaaSの進化モデル

(出典: ITFの説明を基に作成)

(2) 都心大改造が進むパリ

パリでは、イダルゴ市長の強いリーダーシップの下でパリ大改造計画が行われており、セヌ川沿いの自動車専用道の歩行者専用化やロータリーの公園化、各所での自転車レーン設置など、2020年までに自動車交通量を半減することを目標とした大規模な事業が各地で施行された。

自転車レーンには自転車シェアリングや電動キックボードに乗った市民の姿が多くみられた。ロータリーを公園にしたリパブリック広場では、かつては自動車で埋め尽くされていた空間が、多くの人で賑わっていた。バス停留所は時刻表などが見やすく美しいデザインであった。

パリには様々なMaaSが存在し、その中でもCitymapper (MaaSアプリ) は、レストランのメニューを開いた時のように自分の位置から利用可能な移動手段を把握でき、安心して利用できた。目的地まで自分の好みにあった移動手段の組み合わせと経路が提案され、そ

¹交通・社会経済部門 研究員 ²業務執行理事、研究本部企画戦略部長 博士 (工学)

の日のTPOに応じて、多様な移動が楽しめ、もっとお出かけしたくなるようなUI (User Interface) とサービスのお陰で、充実した時間を過ごすことができる。



写真-2 モンテペロ通り1車線自転車レーンに再配分
(筆者撮影)



図-2 代表的なMaaSアプリ「Citymapper」

3 交通先進都市のストラスブール

ストラスブール市の地域整備課長によると、特徴的だったのは、これまでは別々の計画であった土地利用の計画と交通計画を一つに融合し、新しい枠組みの計画が策定しており、住宅エリア、商業エリアと道路、公共交通、駐車場配置等がセットで計画されているとのこと。しかも公共交通のサービス水準と駐車場基準も一体であることが、非常に特徴的であった。このように一体的な計画により、無秩序な住宅や商業の開発、企業立地を抑制し、都市機能の集約化が可能となっている。

ストラスブール市内を歩いてみると、トラムとBRTがまちの骨格を形作っており、中心部は早朝の荷さばき車両を除きクルマをほとんどみかけることが無かった。無人のライジングボラードにより都心の交通をマネジメントし、まちは非常に活気があり人で溢れており、クルマを気にせず、テラス席で多くの人が食事や会話を楽しんでいる光景が印象的であった。裏道では子供達がサッカーを楽しむ様子もあり、日本人が忘れていた原風景をストラスブールで見たことも感懐深いものであった。



写真-3 中心部のターミナル駅(ストラスブール)
(筆者撮影)



写真-4 まちの交通をマネジメントする無人のライジングボラード(筆者撮影)

4 おわりに

本視察のポイントは①MaaSプラットフォームの重要性、②自動運転社会に対応した法制度と財源制度、③土地利用計画と交通計画の融合、の3点が挙げられる。日本への示唆として、日本の文脈に即した日本版MaaSプラットフォームの構築、自動運転社会を見据え、法制度と一体となった財源制度が重要と考えられる。また、土地利用と交通を一体的に計画することで、都市機能を集約化し、行政コストを抑えつつ街の魅力向上を図ることが、地域創生のための一つの方法と考えられる。

謝辞

本調査は、JAPIC(一般社団法人日本プロジェクト産業協議会)のプロジェクトの一環で実現したものです。また、調査団長の筑波大学石田東生名誉教授をはじめ、OECDの伊藤香織様、ミラノ在住のヴァンソン藤井由実様には貴重なヒアリングの機会を設けて頂きました。感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 牧村和彦(2020):世界初の「MaaS法」の衝撃フランスが1兆円超えの大型投資、日経クロストrend